

世帯と人口

(6月1日現在)

世帯	43,346	(+122)
人口	117,642人	(+237)
男	60,340人	(+125)
女	57,302人	(+112)

広報えびな

編集・発行

海老名市役所 広報広聴課

〒243-0492

神奈川県海老名市勝瀬175番地の1

☎ (046) 231・2111

URL <http://www.city.ebina.kanagawa.jp>

*この広報は再生紙を使用しています。

害虫の繁殖防止に活躍する「フェロモントラップ」



21世紀へ前進する海老名⑱

自然の摂理を農業に活用

近年、肥料や農薬の大量散布が問題視されてきています。これからの農業には、身の回りの水や空気、土、人体や他の生き物への配慮も求められています。このため、農薬の影響を少なくしたり、農薬の代わりに自然の摂理を応用した、さまざまな技術の研究が進んでいます。市内でも、こうした技術を導入する農家が増えてきていますので、今回はその様子を紹介します。

適切な養分作物に「点滴」

本郷のトマト農家、大熊栄久さん方では、肥料を施す代わりに、養分を含む液を根元の土に点滴する「養液土耕」を去年から始めました。人間の経験や勘では、肥料を過剰に施してしまい、吸収しきれず土中に残った肥料が地下水に溶けて、水質を悪化させることがあります。大熊さん宅では地下水を生活用水にしていますが、含有する窒素成分の濃度が高く、その原因が肥料のやりすぎと分かったことが導入のきっかけと。点滴は機械による自動制御で、生育状態に応じ最適な量の養分を作物に与えます。



この方法を取り入れた当初は、「肥料の濃度が薄いせいかわ、育ち始めは葉が小さく不安を感じましたが、結果、収穫量は約1割程度増えました。農業は自然サイクルの一部ですから、環境に与える影響には注意していきたいですね」と大熊さんは話しています。

害虫の雄だけ誘う「わな」

また、殺虫剤を使わず害虫から作物を守る方法も行われています。雌がフェロモンという物質を発散し雄を呼ぶ習性を利用して、わなに特定の害虫のフェロモンを仕掛けて雄だけを誘い閉じこめ、繁殖できないようにする「フェロモントラップ」がその一つ。

キャベツ畑にこの方法を導入した杉久保の川口勝男さんは、「蛾の幼虫が作物を食いあらすので、半径60cmの間隔で畑にトラップを置いたところ、雄の成虫がたくさん集まりました。その結果幼虫が生まれなくなり、被害は激減しました。おかげで殺虫剤をほとんど使わなくなり、他の虫が畑に戻って来るようになりましたよ」と言いながら、つがいの蝶が舞い飛ぶ姿を指さしていました。

この他に、害虫が嫌う黄色い光を発する電灯「黄色防蛾灯」の試験運用が、門沢橋のカーネーション農家でまもなく開始される予定だそうです。自然のサイクルを意識し、その摂理を効果的に利用する…こうした発想から生まれたさまざまな技術の普及が、未来の農業を支えていくのかも知れません。